知事と和い和いミーティング

未来をつむぐ「明日の京都」ビジョン　あなたとつなぐ府民交流会ｉｎ南丹

日　時：　平成21年7月25日（土）15:00～17:00

場　所：　ガレリアかめおか２階

登壇者：　山田　啓二　京都府知事
栗山　正隆　亀岡市長
佐々木稔納　南丹市長
松原　茂樹　京丹波町長
竹葉　　剛　京都府立大学学長、「明日の京都」ビジョン懇話会座長
高木　　光　京都大学大学院教授、「行政運営の基本理念・原則となる条例」検討委員会座長
十倉みゆき　全国都道府県対抗女子駅伝競争大会京都府チーム監督【ゲスト】

○司会　さて、皆様、京都府では、平成 22 年に計画満了となる新京都府総合計画などに続く新たなビジョンづくりなどを進めておりますが、これらの検討に当たり、多くの皆様から、広くアイデア、提案、意見をいただきたく、府内各地で府民交流会を開催いたしております。

本日は、京都府南丹地域の未来や京都府に望むことなどについて、会場の皆様から、御意見、そして皆様の思いをいただき、一緒に考えてまいります。会場にお集まりの皆様も、どうぞ積極的に御発言いただきたいと存じます。

それでは、ここで本日の府民交流会の進め方を御説明いたします。

まず初めに、ステージ上の皆様から一言ずついただいた後、会場から御発言をいただきます。　御発言でございますが、私の方から「会場の皆様どうぞ」と申し上げますので、その際、発言を希望されます方は、手を挙げていただきますようにお願いいたします。手を挙げていただいた方の中から発言の指名をさせていただき、係の者がマイクを持って伺います。そこで、お名前とお住まいの市または町名をおっしゃってください。それから一言お願いいたします。

本日は、特にテーマを設けておりませんので、どのような御意見、思いでも結構です。できるだけ多くの方の声をお伺いするために、発言時間は１回１分から２分で簡潔にお願いいたします。また、これもできるだけ多くの方に御発言いただくため、御発言の回数はお一人２回までとさせていただきますので、御了解をお願いいたします。

なお、指名した方以外の御発言、そしてやじなどは進行の妨げとなりますので、かたく

お断りいたします。

また、本日の府民交流会の模様は、記録のため録音させていただくとともに、後日、京都府の広報テレビ番組で放送するほか、広報紙、ホームページなどで御紹介させていただくことがございますので、御了承くださいませ。

さあ、お待たせいたしました。壇上に御登壇いただきました。

それでは、ただいまから「未来をつむぐ『明日の京都』ビジョン　あなたとつなぐ府民交流会ｉｎ南丹」を開催させていただきます。

それでは、ステージ上の皆様を御紹介いたします。

まず、山田啓二京都府知事です。栗山正隆亀岡市長です。佐々木稔納南丹市長です。松原茂樹京丹波町長です。「明日の京都」ビジョン懇話会座長の竹葉　剛京都府立大学学長です。「行政運営の基本理念・原則となる条例」検討委員会座長の高木　光京都大学大学院教授です。

そして、本日のゲストスピーカー、立命館大学女子陸上競技部のコーチでいらっしゃいます十倉みゆきさんです。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日は、京都府議会議員の皆様にも会場にお越しいただいておりますので、御紹介させていただきます。

桂川孝裕様です。上田秀男様です。そして、元府議会議長の酒井国生様です。

ありがとうございます。

それでは、府民交流会開会に当たりまして、山田啓二京都府知事からごあいさつ申し上げます。

○山田啓二知事　こんにちは。本日は、「『明日の京都』ビジョン　あなたとつなぐ府民交流会ｉｎ南丹」ということで、こうして大勢の南丹の皆様にお集まりいただきまして、心からお礼を申し上げたいと思っております。

この催しは、これから 10 年先の京都を考えてどういう行政を行っていき、どういう未来の図を描いていくのかを決めていく。私がよく言っているんですけれども、行政をやっていく思いというのを条例に託して、府民で、みんなで共有していこう、そして、これからこういう地域をつくりたいという願いをビジョンとしてあらわしていこうということで、今、私どももその作成に取りかかっていところであります。

世の中を見ますと、先日、解散が行われまして、そんな悠長な話じゃないと、今の経

済・雇用の問題の中で、さあ、国政をどうするかという決戦がこれから行われようというときでありますので、10 年先、20 年先の話って何となくこんな時期にやるのかなという、そういう思いの方も私はいらっしゃるんじゃないかなというふうに考えます。

ただ、こういうときだからこそ、やはり未来に向かってのしっかりとした夢を描いていかなければならない時期なんじゃないかなというふうに思います。厳しい時期だから目の前の課題を一歩一歩克服していかなければならない、それは当然だと思います。ただ、目の前の課題を一歩一歩克服していって、その先に来るのが、未来が、いわばきょうの積み重ねの結果だという面もあるとは思うんですけれども、結果だけの未来というのは何かやっぱり寂しい気がするんですね。やっぱり自分たちが、こういう京都を、こういう南丹をつくりたいと思って、次の世代の皆さんにもこういう夢を持ってもらいたい、願いを持ってもらいたいと思って、それを一生懸命みんなで実現をしていくことによって、本当に満足のいく地域づくりができるんじゃないかなと私は思います。

ですから、本当に今、経済も雇用も厳しい上にインフルエンザまでやってまいりまして、どこを見ても何となく閉塞感漂うときでありますけれども、こうしたときこそ、ぜひとも、きょうは皆さんの思いや夢を、願いを聞かせていただきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

○司会　それでは次に、「明日の京都」ビジョンの概要につきまして、高嶋　学京都府政策企画部長から説明いたします。

○高嶋　学　高嶋でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

恐れ入りますが、お手元の封筒の中に資料が入ってございます。右の上に１と書いた横長のＡ４の資料が入ってると思います。よろしゅうございましょうか。京都府の「明日の京都」ビジョンは、こうして検討していますという資料でございます。これに基づきまして少し御説明をさせていただきます。

京都府では、これまで 10 年間の京都府の総合計画であります新京都府総合計画、新府総と呼んでおりますが、それと、そのうちの後半５年間の重点目標をあらわしました中期ビジョン、この二つの計画に加えまして、各振興局ごとにつくりました地域振興計画、これを基本として府政運営を進めてまいります。これら三つの計画は、おおむね来年、平成 22 年をもって計画期間が満了をいたします。

そこで、それの後継となる計画づくりに、昨年の８月から有識者の皆様による会議を設

置するなど、検討に着手をいたしました。新しい計画は、これまでの総合計画という発想を転換いたしまして、お手元の資料にゴシックで書いてありますとおり、基本条例、長期ビジョン、中期計画、地域振興計画、この四つの柱でつくってまいりました。

まず一つには、10 年ないし 20 年後の京都府社会のありたい姿、将来像、これを長期ビジョンとして描きます。

次に、長期ビジョンを実現するための四、五年間の重点施策を府全体の中期計画また広域振興局ごとの地域振興計画、この二つの計画にまとめてまいります。

そして、それらとは別にもう一つ、基本条例がございます。

長期ビジョンが、京都府は将来こうありたいという願いをあらわすものとしましたら、基本条例の方は、世の中が変化をしても決して変わることのない京都府政の基本的なあり方や原則を条例として、しっかり定めておきましょうというものでございます。

これら四つの条例やビジョン、計画につきましては、京都府政の将来にわたる基本的な柱となるものでございますので、最終的には、府議会に御報告をし、御意見、御議決をいただいて、成案とするものでございます。

以上でございます。どうぞよろしくお願いを申し上げます。ありがとうございました。

○司会　それでは続きまして、「明日の京都」ビジョン懇話会座長、竹葉　剛京都府立大学学長から、「明日の京都」ビジョンについての思いを一言お願いいたします。

○竹葉　剛京都府立大学学長　皆さん、こんにちは。府立大学の学長の竹葉です。今回は、ビジョン懇話会の座長を務めております。どうかよろしくお願いします。

懇話会は、昨年の８月から始まりまして、ことしの６月まで７回の懇話会を開きましたけれども、その内容は、京都府のホームページに概要が載っておりますので、そちらを見ていただきたいというふうに思います。

本日は、そのこととは別に私自身の思いを言えということですので、３点ほど述べてみたいと思います。

一つは、京都府の誇りというものを大切にしたいということです。人は誇りがありますと頑張ることができますけども、誇りが傷つけられますと崩れていきます。お互いの誇りを大切にしながら、地域の誇り、京都府全体の誇りを大切にしていきたいというふうに思います。

二つ目は、これからは、自分たちのことは自分たちでやろうという機運を高めていくこ

とが大切ではないかと考えております。寺島実郎という人がこういうことを書いております。世界の当たり前の常識だが、古今東西のいかなる社会共同体においても、一人前の大人というのは、稼ぎと勤めができる人のことであると。ここで言う稼ぎというのは、言うまでもなく経済的な自立のことですけども、勤めというのは、その共同体におきます必要な公的な貢献ということで使っております。彼は、戦後世代の中に広がりました私生活、自分を中心にした生活の部分を中心にしたらいいんじゃないかという、そういう考えの影響で、勤めの意識が薄くなっているんじゃないかということで。しかし、これからは勤めの意識を大切にしていく必要があると、こういうことを言っておりまして、私も共感しているところであります。

大人になるための要件として稼ぎと勤めが必要だということになりますと、親が子供の成長にあわせて教育していく課題とも言えますけれども、大学においても、卒業式でこのことを言いまして自覚を促してるところです。

三つ目は、特に昨年の秋以降に顕著になってることなんですけども、派遣切りに遭いますと、その日から住む場所がない、それから食費がないと。その結果、自殺したり、それから犯罪に走ったりということが起こる状況がありますけれども、我々がこのようなことの起こらない社会を目指す必要があるというふうに考えております。断片的な内容で大変恐縮ですけども、私の思いということで述べさせていただきました。御清聴ありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

次に、「行政運営の基本理念・原則となる条例」検討委員会座長、高木　光京都大学大学院教授から、条例についての思いを一言お願いいたします。

○高木　光　高木でございます。

条例の検討の状況につきましては、資料の２番、右肩についております中間報告案のポイントというのをごらんいただきたいと思います。

この報告案は、仮に京都府で基本条例をつくるとすればこのようなものが考えられるということで、ここ１年ほどの検討をまとめたものでございます。三つの基本理念と五つの基本原則というふうに、とりあえずまとめております。

ただ、これはまだまだ道半ばということでございまして、先ほど部長からも紹介がありましたように、基本条例というのは、基本的には議会の議決を得てつくるものですので、

これから府議会の皆様方と相談して方向を定めていきたいと考えております。

本日は、私も三つの点について思いを語りたいと思います。

一つは、基本条例というものが、時代の要請であるということであります。地方分権一括法から今ちょうど 10 年たつわけですけれども、この 10 年の間に、市町村レベルでは自治基本条例というものがかなり広がってきております。都道府県レベルでは、まだ神奈川の例があるだけで、全国的にはまだまだということなのですが、これから 10 年、今後 10 年を見ていきますと、恐らくそれが広まってくるであろうと。まず、基本的なルールを定めて、それに基づいてビジョンを実現していくと、こういうのが恐らく都道府県レベルの標準装備になるだろうというふうに考えております。

それから二つ目は、これは繰り返しになりますけれども、議会とともに歩むということが非常に重要であると思います。基本的には、府民の意思を反映した府政ということになりますと、知事だけではなくて、議会がチャンネルとなって府民の意思をくみ上げていくと、そのためのツールとして条例が非常に重要であるというふうに思います。

それから三つ目ですけれども、条例とか私がやってる法律というのは、余り夢を語るにはふさわしくないものなのですけれども、地味であるけれども大切なものであると。これは手前みそになって恐縮ですけども。そういうことで、すべての物事について、ルールに立ち返って考えるということが重要な時代が来てるというふうに考えております。

以上、３点について申し上げて、基本条例についての御理解をいただければと考えております。

○司会　ありがとうございました。

さて、本日は、南丹管内の２市１町の市長、町長にも御出席いただいております。

それではまず、栗山正隆亀岡市長に地域の将来にかける思いを一言お願いいたします。

○栗山正隆亀岡市長　亀岡市長の栗山でございます。一言思いを述べてみたいと思います。

京都府さんの方では、「明日の京都」ビジョンということでございますが、亀岡市は今まさに、今年度と来年度を経まして、第４次の亀岡市総合計画を策定をしていこうということで進めているところでございまして、各界、各層いろんな方、子供さんも含めまして、亀岡の将来についての夢・意見・願い、こういったものをお聞かせいただいているところでございます。私は、この総合計画を夢ビジョンと申しているところでございますが、いろんな方から夢を募っているところでございまして、亀岡市も、まちづくりにおいては、

まだまだハード面では、道路の整備とか災害に強くなるための各種の整備、こういうことも必要でございますし、またソフト面では、社会保障の充実とか、地域福祉の向上、こういうことにかかわる取り組みもまだまだ必要でございます。こういうことでございまして、こういうことを進めながら本当に市民の皆さんが安全・安心にお暮らしいただける、そんな町をつくってまいりたいということで、今、夢ビジョンを策定中でございます。

それから、安全・安心ということにつきましては、去年の３月、山田知事さんの方の大変なお支えもございまして、これまで亀岡市が進めてきました、こういった安全・安心のまちづくりの取り組みが世界レベルで評価をされまして、我が国の自治体の中で初めて、ＷＨＯ、世界保健機関のセーフコミュニティの認証を所得することができました。今後は、このセーフコミュニティの取り組みをさらにさらに進めてまいりたいと思っております。

そして、私がスローガンに掲げております、ぬくもり、にぎわい、心通う共生の町をつくってまいりたいと思っているところでございます。私は、唯心所現という言葉が好きでございます。どんないい町も、それに対する夢や思いや願い、こういったことがなくては、そしてそういう夢を常に努力しながら、願いを努力しながら追い求めていかなければ、それは実現をしないと思っております。一歩一歩着実にそういった夢を追い続けていきたい、確実にこの町をさらに、私はこの亀岡の町が大好きでございます、生まれも育ちも亀岡でございます。このすばらしいふるさとをさらに一歩でもすばらしいものにして次の世代に引き継いでいきたいなと思っているところでございます。

以上でございます。

○司会　ありがとうございました。

それでは次に、佐々木稔納南丹市長に、地域の将来にかける思いを一言お願いいたします。

○佐々木稔納南丹市長　南丹市長の佐々木でございます。

御承知のように、南丹市は四つの町が合併いたしまして３年半が経過いたしました。こういった中で、合併してよかったなと思っていただけるような、一つは、私は、市としての一体感と申しますか、その一つと、もう一つが、やはり旧町での特性、よい方の特性は残してほしいという市民の皆様方の願い、こういったことを合併した町で進めていかなければならない。こういった中で、私どもも、南丹市の総合振興計画というのをまとめました。まさに、10 年後の南丹市の未来を描くということでございます。

こういった中で３年半のまちづくりを進めてきたわけでございますけれども、本日も、このガレリアの中に京都府南丹パートナーシップセンターというものを設けていただきましたけれども、私どもの南丹市におきましても、大変少子高齢化というのは進んできております。やはり今日までの行政のあり方だけでまちづくりができるものではないということを考えています。やはりこういった中では、市民の皆様方のお力、これを行政とともにどうつないでいくのか、まさに皆様方とともにまちづくりを進めていく、そして法ともいろいろと、手法も考えていかなければならないし、市民の皆様方のお力をおかりする手段と申しますか、こういうことも構築していかなければならないということで、今、取り組んでおるところでございます。

山田知事さんよくおっしゃいます、今、地域力が必要だと、それぞれの地域の力というのをいかに結集してまちづくりに生かしていけるかと、これが私たち南丹市にとっても大きな課題であるというふうに考えております。

こういった中で、厳しい地域経済の状況もありますし、基幹産業であります農林業の関係、そして安心・安全なまちづくり、大変大きな課題がたくさんございます。こういったことに対して真っ正面に向き合う中で、私は、市民の皆様方のお力をおかりし、また京都府、そして亀岡市さんや京丹波町さんとの連携をさらに強める中で、これからのまちづくり、輝くまちづくりを目指していきたいと、このように考えております。幸いことしの秋には、京都新光悦村、これが先端産業と伝統産業をマッチした新しい産業拠点として、京都府において開発していただきました。これがやっと村開きという形を迎えます。それぞれの節目節目に、やはり連携を強めながら、そして市民の皆様方のニーズに的確に対応できるまちづくりを、これからも市民の皆様方とともに力を合わせて取り組んでいきたいと、こういった思いをいたしております。どうぞ皆様方の御理解や、また力強い御協力を、この場をおかりしてお願いいたします。

以上でございます。

○司会　ありがとうございました。

それでは次に、松原茂樹京丹波町長に、地域の将来にかける思いを一言お願いいたします。

○松原茂樹京丹波町長　皆さん、こんにちは、京丹波町長の松原でございます。

私たちの町も３町が合併をいたしまして、今は３年９カ月目でございまして、非常に地

方分権時代の到来を控え、地方財政が本当に厳しい状況の中でございますけれども、平成 28 年度を目標年次といたしました町の総合計画に基づきまして、現在、本町の目指すこの将来目標の「人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち　丹波高原文化の郷　京丹波」ということを実現するために邁進をいたしておるわけでございまして、その中には、人材育成でございますとか、安心・安全、産業振興、あるいは環境保全、定住、交流あるいは地域力といった、こうした六つの基本方針を定めまして、まちづくりに努めているところでございます。それには徹底した行財政改革と財政基盤の強化を図り、町民とともに汗を流して、行政と共同の一体となったまちづくりを進めることが大事だということで、今、住民自治組織によるまちづくりということで、それぞれ地域の皆さん方に取り組みをいただきながら、いよいよ始動をし出したというところでございます。

また、最近の非常に厳しい社会経済情勢の変化でございます。そうした中にありまして、先人の皆様方のたゆまぬ御努力によりまして、京都縦貫を初めといたします交通網の整備でございますとか、また、京都府さんの方でも本当に御理解をいただきながら京都府事業として取り組んでいただいております、畑川ダムによります水資源の確保といったようなインフラ整備が進んできておりまして、これらを十分に生かしながらのまちづくりを進めていきたいというふうに思っておるところでございます。

そうした中に、やっぱり合併をしてそれぞれ地域の特性でございますとか、あるいはまた価値観の違いもございまして、なかなか合併直後の町のあり方というのは、いかにも難しいということの実感をいたしておるわけでございますが、そこを先ほど申し上げましたように、もう一度自分たちの周辺の問題・課題を本当に、少子高齢化の問題もまさにそのとおりでありますし、先ほど申し上げましたように、非常に厳しい財政状況で、何を選択し、集中をしてまちづくりを行っていくかということを、行政主導ではなしに、本当に地域の皆さん一緒になって考えていくまちづくりが、私たちの町に求められているんではないかということで、今、その取り組みを進めさせていただいておるところでございまして、究極的には、いつも言われることでございますけれども、この町に住んで本当によかったと、この合併もよかったと言えるような中で、できれば居心地のいい、元気で自立した、存在感のある町にしたいというふうに思って、今、努力を重ねているところでございます。また、皆さん方の御支援をいただきながら邁進をしてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。ありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

さて、皆様、本日は、ゲストスピーカーとして南丹高校で中距離選手として活躍され、立命館大学女子陸上競技部コーチで、全国都道府県対抗女子駅伝の京都府チームの監督を務めておられます十倉みゆきさんに御出席いただいております。

それでは、十倉みゆきさんに「ふるさとへの思い」と題して少しお話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○十倉みゆき　立命館大学女子陸上部で長距離のコーチをしています、十倉と申します。地元亀岡出身で南丹高校を卒業しております。

今回は、ふるさとに対する思いということでお題をいただいたんですけども、なかなかスポーツの現場で暮らしてますとふるさとに思いをはせるという行為、行動をしたことがなかったので、今回改めて、亀岡について、南丹地域について考えてみたんですけれども。本当に学生時代は地元に思いをはせるということはほとんどなくて、むしろ亀岡に住んで亀岡から大学に通ってるときも何も感覚もなく、ただ家があるからいるという形だったんですけども、やっぱり亀岡を離れるというか、就職をしてそれぞれのいろんな場所に赴くことになって、今改めて亀岡で育ったことに対して思い起こしてみると、学生時代は本当に亀岡出身というと、結構、都会に住んでる子たちには、田舎だ、田舎だと言われていい思いはしなかったので、特に亀岡が好きという感覚はなかったんですけれども。本当に今も、きょうも勤務地から帰ってきたんですけれども、電車だとやっぱり馬堀駅のあのトンネル過ぎたところに広がる風景だとか、あと車だと老ノ坂のトンネルを過ぎて広がる田園風景を見ると、やっぱりこの年になってというか、今はそういう風景を見るだけで本当にほっとする、帰ってきたなという思いをすごく抱くようになってきました。本当に小さいころは全然思わなかったんですけども、今は本当にそういうふうに思えるようになってきました。

よく都会、田舎という分別するのもおかしいとは思うんですけども、私はこういう自然のある姿が本当にすばらしいと思ってまして、今までは当たり前のようにそれがあったので特に何も思わなかったんですけども、遠征ですね、合宿とか試合に行ったときに、例えば東京とか行くと本当に走る場所がないんですね。最近はランニングブームで走ってる人口が多いんですけれども、やっぱり皇居の回りの歩道だとか代々木公園の小さいところとか、本当に所狭しと、皆さん小さな限られた自然の中で走られてますし、大阪でも、大阪

城公園だとか、長居公園だとか、本当に小さいところをぐるぐる大勢の人数で回られてるのを見ると、亀岡の自然の中で生まれ育ったことは、当たり前だったけども本当は当たり前じゃなくて、本当にすばらしい環境だったんだなという気がします。特に今思い起こすと本当に走った思いしかないので、ああ、この坂道で坂ダッシュしたなとか、この田んぼ道で練習をしたなとか、そういう思いばかりなのですけども、それが私のやっぱり青春でもありますし、自分がそれで育てられたという実感がすごくあります。自然の中で育てられたその体力もそうなんですけども、やっぱり恵まれた指導者の方にもたくさんお会いすることができて、環境をすごく有効に活用してこれまで来られたんじゃないかな、今の自分があるのは本当にふるさと亀岡、南丹地域のおかげなんだなという気がします。

人が何かをするときによく言われるのは、時間、空間、仲間、この三つの条件が必要だと言われますけども、やっぱりこの亀岡・南丹地域には、時間はそれぞれの所有するものだと思いますけども、やはりそういう機会もみんながつくってくれてましたし、環境という意味でもそういう自然の中で走り回れたということはすばらしかったと思いますし、仲間というのもありますけど、やっぱり指導者の方々もしくは友人とか、また家族とかに支えられて、その三つの条件すべて満たされていたんじゃないかなと、今になってすごく思えるようになってきました。

私がこうやって言うのも、多分私だけじゃなくて、本当に亀岡から育った著名な選手はたくさんいますし、高校駅伝もそうですし、大学駅伝も、実業団の駅伝でも、箱根駅伝でも、たくさんの人が亀岡出身、南丹地域出身が活躍してるのは、多分、その成果なんじゃないかなと思います。もし、その方々とお話をしたら、多分みんながそういうふうに言うんじゃないかなという気がします。

最近でも、亀岡に帰ってきて自然の空気を吸う中で、本当に元気を取り戻すことができますし、今回、このようなお題をいただいて、考えれば考えるほど亀岡で生まれ育ったことを本当にすばらしく思っております。

今回、地域力向上ということでお話をいただいたんですけども、地域力というのは、私たちがやってる、駅伝でもやってるチーム力向上とかぶってくると思うんですけども、やっぱり地域地域と言いますけども、私たちはチーム力を上げるときにいつも言うんですけども、チーム力、チームというのはやっぱり実体がないもので、一人一人の集まりがあってチームになっていくわけですから、やっぱり一人一人がそういう、私だったらたまたま

スポーツだったんですけども、スポーツを通じて元気になる、元気な人がふえると地域力は向上すると思いますし、地域のよさをよく知って、地域を好きになって、地域をまた活用して、いろんな仲間でいろんな活動をすることが地域力の向上になってくると思います。

また、今では、地域力向上ということで地域のブランド力がよく叫ばれてますけれども、やっぱりいろんな名産物だとか、あとはゆるキャラとか、いろんなものがはやって地域力向上に皆さん取り組まれてると思いますけども、地域力向上という面においてやっぱり一人一人が元気で、そしてなおかつそういうすばらしい環境であるということに対して、ブランドというよりはやっぱりプライドを持つ、プライドというのも高飛車なプライドではなくて、やっぱり一人一人が地域に対して誇りを持って活動するということが大事になってくるんじゃないかなという気がします。やっぱりこれからも亀岡・南丹地域から元気な人がたくさんできて、たくさん地域に対してプライド、誇りを持って生活できるような空間になっていったらなというふうに思います。

私自身も、皆さんが元気になれるような、そして京都への思い入れということで、全国都道府県女子駅伝の監督をさせていただいてますので、そちらで活動をできれば地域活性化の一端を担えたらなと、おこがましくも思っております。

ぜひとも１月 17 日は、京都府チームも応援していただきたいなと思います。済みません、最後宣伝ですけど、よろしくお願いします。

済みません、どうもありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。熱い思いを語っていただきました。

さあ、ここまで京都府の未来や地域への思いについてお話を伺いましたが、皆様への熱い思いをお聞きになりまして、山田知事から、少し感想がございましたらお願いできますでしょうか。

○山田啓二知事　きょうで、実は府民交流会は３回目でありまして、先週の土日で、舞鶴、宮津、中丹地域と、それから丹後地域でやってまいりました。そして、きょう南丹に来たんですけれども、やはりこちらの方が、ある面では成長、伸びをみんなで感じながら、次の未来を語りやすい雰囲気があるのかなという感じがしております。

亀岡自身もじりじりと人口がふえている地域、ちょっと今横ばいになってきてあれですけども、多くの地域が過疎・高齢化に悩んでいる中では、まだ高齢化率もそんなにむちゃくちゃに高い、ちょっと京丹波町高いですけどね。多分、３人の首長さんの話聞いてても、

京丹波町の松原町長さんの話が一番悲観的だったなという感じがありましたけども、そうしたものをやっぱり感じました。

それで、その背景にあるのは、この地域がやはり大阪や京都に割と近接をして、農業にしろ、観光にしろ、それなりの今やっぱり力をつけてきている地域だという気が私はしております。

その上で先ほど十倉さんがおっしゃったんですけれども、非常に印象的だったのは、都会と申しますか、東京とかそういうとこに走るところがないという話でした。走るところがないというのは、言いかえますと、本当にスムーズに歩ける場所がないということでしょうね、やっぱり。つまり歩くこともなかなか本当にきちっとできないということは、地域が、線として、ネットワークとしてなかなかつくりにくい場所やということだと思っております。つまり、点としてしかできない、個別にしか暮らすことのできない、これがやっぱり都会やないかなというふうに思っておりまして、その点に関すると、自然に恵まれ、走るところがあり、そして都市の近郊として産業も、農業も夢を追う、まだ持つことのできる地域という南丹、私は、大変貴重な地域としてビジョンをつくれるんじゃないかなという感想を持ちました。もちろんそれだけではなくて、まだまだ不便な点はあります。まだ高速道路も十分につないでおりませんし、多分、農家の方々は鳥獣害に苦しんで、気がつくとあらされてしまってえらいみたいな話もいっぱいありますし、そうした中で問題点もたくさんあると思うんですけれども、そうした問題点を前向きに解決できる地域が南丹というふうに、きょうの今のお話を聞いて感じたのはすごく励みになりました。

○司会　ありがとうございました。山田知事からお話を伺いました。

さて、会場の皆様、お待たせいたしました。ここからは、京都府南丹地域の未来、そして京都府に望むことについて、会場の皆様と意見交換をさせていただきます。

発言を御希望の方にお願いいたします。手を挙げていただき指名させていただいた方に係の者がマイクをお持ちいたします。最初に、お名前とお住まいの市または町名を言って御発言ください。

なお、初めにもお願いいたしましたが、できるだけ多くの皆様の声をお伺いするため、実は時間も４時までしかございません、20 分弱ということになりますので、発言は２分以内でお願いいたします。

さあ、それでは早速始めます。御意見を、会場の皆様どうぞお手をお挙げください。

お一人挙がっています、じゃあ、はい、御指名させていただいてよろしいですね。じゃあ、お願いいたします。

○発言者１　本日はありがとうございます。こちらの亀岡の旧ＮＰＯ情報センターのときに私塾、一生一期一縁という、若者発のＮＰＯ塾の代表を務めさせていただいております。

南丹地域の未来についてということで、地域の中の若者文化というところで幾つかちょっとお願い、お願いといいますか御指南いただきたいことがありまして、地域の中でいかに若者が生活をしていけるか、先ほども竹葉学長さんのお話にもあった稼ぎと勤めというところですね。若者が地域の中で生きていけるというときに、ただ単に就職をするということだけではなくて、若者同士のコミュニティーといいますか、つながりがしっかり地域の中で持てるということが、これから先に必要になってくると思います。例えば、働いていて時間がない、あるいはフリーターをしているからお金がないというふうな現状で、地域の中に貢献することがすごく難しい現状が今出てきていると思います。あるいは小・中学生や高校生に関しても、部活や受験ばかりの生活で、地域のことを考える余裕がないという現状も恐らく出てきていると思います。今後の地域の発展ということを考えたときに、学校や家庭だけではなくて、地域の中の教育というものが一つ大きなテーマになってくると思いますので、今後のそういう地域の中の持続可能性といいますか、その辺に関して御考慮いただけたらと思います。ありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

○山田啓二知事　やっぱり次の世代をつくるというのは若い日たちなんで、若い人たちがやっぱり地域に夢を持って暮らしていただく、そして、その後、さらに子供たちも通じて地域に愛着と誇りを持っていただくというのが、我々は、やっぱり地域の行政をやってる者にとっては、一番大切なことの一つじゃないかなというふうに思ってます。

僕らがその中で一番難しいというのは、例えば若い人たち、特に子供たちの世代が、どうやったら地域を意識してもらえるんだろうかなというところがあって、教育関係で我々非常に配意しましたのは、一つには、若い世代、子供たちにとって一番興味のあるのは、一つは給食だろうから、給食のときから地産地消で地域のものをできるだけ食べてもらおう、それによって、うちの地域にはこんなすばらしいものがあるんやなというようなことをわかってもらうようなところから始めていく。

さらには、これは中学生ぐらいになったら一回職場体験をしてもらおうということで、

いろんなスーパーや、それから消防署なんかでちょっとだけ一緒に過ごしてもらう時間をとるという感じで、地域に向けて目を開いてもらう時間をつくりました。

それからもう一つは、やっぱり地域に暮らしてるということは、地域の人たちから見守ってもらっているんだなということを子供たちがわかるような形が一番いいんじゃないかなと思って、安心・安全見守り隊という登下校の、ＰＴＡの方や地域の方々がその見守りをしてくれる活動。これを、最初はごく一部のところでやっていたんですけれども、440の小学校区全部に広げまして、そうしていくことによって、自分たちは地域で暮らしてるんだということがわかってもらえるようなことを私は積み上げてやってきました。

その上に立って、今度は若者がうまくネットワークをつくれるかというと、我々も、ここは非常に、今、大きな難点と申しますか、課題になっています。

というのは、やっぱり一番気にしているのは、割と若い人たち同士では動くんだけれども、これが年代を超えた活動というのはなかなか進んでいない実態があるような気がします。インターネットとか、２チャンネルとか、そうしたツールを通してのある面でのネットワークというのは前よりも進んでるかもしれませんけども、地域をどうするかとか、フェース・ツー・フェースで本当に人の触れ合いというのはやっぱり減ってしまっている。

だから、この分野を、我々は、どうやって年代を超えて、地域というものも含めてやっていけるのかというところで考えたのが、先ほどからの地域力再生事業という形で、地域でやってる人たちが、それぞれどんどんそこで活動を展開していく。そして、その活動をただ展開していくだけではなくて、それがネットワーク化していくことによって、いろんな人が巻き込まれていく、いろんな人が参加していくことができる、そういう場をつくることが、今の世の中にあっては一つの交流の拠点をつくれる話じゃないかなというふうに思っております。

ですから、きょうオープンしました南丹のパートナーシップセンターとか、もともと活動があります市民の活動推進センター、こうしたものによって、ネットワーク化していくことによって、今、例えば余り地域とつながりのない、活動していない若い人たちが、その場に入っていくような仕掛けを、そこから私たちがつくっていくことによって、若者たちが地域に夢を持てる、または地域をこれから一緒になってつくり上げていく活動に参加するという、そういうシステムをつくっていけたらなというふうに思っています。

○司会　亀岡市長お願いします。

○栗山正隆亀岡市長　亀岡にお住まいの若い方らしいので一言申し上げますが、どんなことででも市役所の方に連絡をいただきたいと思います。

いろんな催し、イベントを各地域でやっておりますし、亀岡市も、市制 50 周年の取り組みのときにもやりましたし、そういうときに、これは京都学園大学の学生さん中心でしたけれども大変な御協力をいただきました。一緒になって、それこそ協働でもって、そういった催し、イベントを大成功に導いていただいたと思っております。

だから、しり込みせずに、何か御連絡いただけたら、また関連のそれぞれの地域なり、また市がやっております取り組みなりを連絡させていただいて、説明させていただいて、可能なら一緒にやっていただけるようなことができたら、そういうことによって若い方の地域に対する思いがまた大きく変わってくると思いますし、ふるさとに対する愛着というものもわいてくると思いますので、しり込みせずに連絡いただけたらと思います。それで、やっぱり市役所に連絡いただくのが一番だと思ってます。よろしくお願いします。

○司会　ありがとうございました。

さあ、続いての御意見どうぞ。お手をお挙げください。

後ろに挙がりました。はい、お願いいたします、そちらの方です。

○発言者２　私は、ＮＰＯ法人援助者の援助、クローバーハウス京都というものの代表をさせていただいております。

援助者を援助するという言葉なんですけれども、人をケアするということに関する、援助をする看護師さんとか、ケア職ですね、教員、教職員もそうだとは思うんですけれども、そういう人たちが、クライアント、患者さんだとか生徒とかとかかわるときに、人とかかわるわけでみんな日常的にやってるわけなんですけれども、その人本位にかかわろうとして、それは本当に大変な仕事だと思うんですけれども、そういう中で人とかかわるところでの気持ちの疲れといいますか、感情の疲弊というのが起こっていると思ってるんです。それで、そのことは、今、世の中が、家族の中に介護力があったわけですけれども、それが核家族化してどんどんとサービスを外から自分の家の中に入れなくてはならないような状態になっていて、そういう状況の中で、こういうケアに関する対人援助職者に、疲弊対策として何かワークを施すとか、いろんな勉強会をするとか、そういうことも多分大事じゃないかなと思っているんです。

それで、ＮＰＯ法人、私たちのところもまだ１年たったところなんですけれども、そう

いうような感じで、そういう人たちがどんどんと元気になって、地域の人たちの健康を守ったり、教育を支えていくということになると思いますので、どうぞその情報なり、支援なりをお願いしたいと思うんです。パートナーシップセンターも亀岡にきょうできたみたいですので大変喜んでおりますし、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

○司会　ありがとうございました。

○山田啓二知事　ありがとうございます。そういう活動を本当に府民の間からしていただけるのは、大変私は心強いし、うれしく思います、多分私や市長もできればケアしてもらった方がいい場合も中にはあるのかもしれませんけども。

まさに地域力再生と言っているのは、何でもかんでも役場や府庁がやるといっても、府庁や役場でやっているのは、これは皆さんから預かった税金なわけですね。それも、今いろいろやらなければならないこといっぱいあります。これから高齢化時代を迎えたら、本当に福祉というものを私たちは基本的につくり直してやっていかないと、安心して暮らせる時代に私はならないと思ってます。そのために全力を注いでいかなければなりません。

また一方で、若い人たちが働く場、しっかりと未来に向かって希望の持てる場をつくっていくためにも投資もしていかなければなりません、そうした点についても、思い切って私たちは未来づくりのために税金を使わせていただかなければなりません。

そうしていきますと、どうしてもそうではない、お互いを支え合う部分、お互いをしっかりと慈しみ合う部分というのは、市民の皆さんの間でできる限りのことをやっていただけるということは、これほど心強いことはないし、そういったのは、私はやっぱりこれからの地域のあり方として一番大切だと思ってます。

私は、先ほど申しました、福祉にしろ、例えば産業基盤にしろ、教育にしろ、ある面ではしっかりとした土台の上に家を建てるようなものだと思います。ところが、今困っているのは、その土台たる部分が砂みたいになってしまいまして、一人一人の皆さんが孤立してるから砂の上に城を建てるような状況に私たちが置かれているように思うときがあります。たくさん警察官をふやしていても、地域の人たちが、地域を見守っている子供たちをしかってあげないということになってしまったら、本当に建物がずぶずぶずぶっと崩れてしまうような感じになります。

ですから、今おっしゃった運動というのは、こうした土台の部分をつくり上げてくれる私は運動だと思ってまして、そうした運動に対しては、我々はくいを打つようにしっかり

と地域力再生という形で支えていくことも、これから行政の大きな役割としてやっていきたいなというふうに思っています。

○司会　ありがとうございました。

じゃあ、続いてよろしいでしょうか。お手が挙がっております。

では、お願いいたします。お二方ですけど、私の方から指名させていただいてよろしいですか。

じゃあ、前の方の方、お願いいたします。

○発言者３　私は、亀岡子育てネットワークという活動をしております。

先日、京都府さんから賞を二つ受賞をさせていただきまして、それは私たちの団体のとても励みになっておりまして、そういう私たちの取り組みを評価していただけたことは、本当に活動のまた力になりますので、大変うれしく思っております。

今、若者とかそういうのが出てきましたけれども、私たちは主に幼稚園・保育所などに行かれる前の３歳ぐらいまでのお子さんの支援を常にしておりまして、そういう方たちって社会的に居場所がなくて私もとても不安でした。今まででしたら、何々会社のだれだれという所属があったんですけども、そういうものがなくなってしまって社会的な接点が全然ありませんでした。どういう支援があったらいいなということを実現してきまして、今、若い方皆さん携帯電話をお持ちですので、その携帯電話を情報発信のツールとしまして配信しています。情報も大変はんらんしてる世の中なので、自分たちが本当に役立った情報を選んで、安心できる役立つ情報を配信しています。大体、生後４カ月ぐらいまでは家から出ることができないので、そういう方たちにはメールであなたは一人じゃないよ、一緒に子育てしようねというメッセージを発信しまして、出られるようになった方には、閉園になりました公立幼稚園を使いまして、週１回親子の居場所を開催しています。

そこに来られてるお母さんの声をちょっと紹介したいと思います。

ずっと子供と二人の生活で引きこもっていたが、ここに来るようになり、やっと人と会話している実感がある。週１回だけれども、子供が毎日来たがってるので毎日でもしてほしい。外遊びがとても好きで、こんなに外が好きな子供だとは思わなかった。最初に来たときにはなかなか入れなかったけれども、帰りたくないと言って最後までいてくれた。そういうふうな本当に居場所がない人の居場所、そういうことであったり、初めて子育てをする方への必要な情報提供というのが、今、とても大切だと思っています。

京都府さんも、亀岡さんも、子育て支援には大変積極的ですし、行政ともいろんなかかわりをさせていただいておりますけれども、まだまだこういう言葉を聞きますと、次の日本を支えていく小さな子供たちを育てていくという大変なプロジェクトが、まだまだ個人の肩にかかってるなというのが実感に思えますので、社会的にももっと支えていけるように、私たちも頑張っていきますし、また行政とも一緒にさせていただきたいなと思っています。

○司会　ありがとうございました。

○山田啓二知事　私ばかり答えているとあれなんかもしれませんけれども、やっぱりこれも大きく変わったとこだと思うんですね。昔やったら子育てというと、おじいさん、おばあさんも一緒にいたり、多くの人々がそばにいて、見てあげるような状況があったと思うんですけれども、自分自身も小さいころ見ると、本当に近所の人にも随分育てられたような感じがあるんですけれども、核家族化が進んでくるに従いまして、そうしたやっぱり昔と地域社会の違いが出てきた。そのときに、昔に戻すことができるかというとそうではない。そして、その中で新しい今のようなネットワークの活動が出てくる。これは、やっぱり時代に応じたこれからの地域社会のあり方の一つじゃないかなというふうに思ってます。それだけに私たちも、地域力再生とかさまざまな試みでそういうものを動かして、しっかりと皆さんと協働の社会をつくり上げていかないと、我々がやることがすべて砂上の楼閣になっちゃうなという気持ちで頑張って、我々も力強く応援をさせていただきたいと思います。

○栗山正隆亀岡市長　よろしいですか、一言だけ。

○司会　一言お願いいたします。

○栗山正隆亀岡市長　本当にこの前、表彰、おめでとうございました。

亀岡市も、それから京都府さんの方も、子育て等には政策的に非常に力を入れてると思ってるんです。妊婦健診も 14 回までやるようにことしからなりましたし、それから子供さんの医療費の問題、今は小学校に上がられるまで入院も通院も無料ですし、それから入院については小学校６年生まで無料にさせていただいてます。そういうことはできるんですが、今、田中さんに御苦労いただいてるようなところにつきましては、まだまだ十分でないところがありますので、大きく皆さんに御苦労をおかけし頼っているところがあるんですが、今後も、できるだけお話を聞かせていただきながら、できる部分については、そ

ういったところの支援をしていきたいなと思っていますので、今後とも、しんどいですが頑張っていただきたいと思います。いつも済みません、ありがとうございます。

○司会　ありがとうございました。

さあ、時間の方が迫ってまいりました、あとお一人ということにさせていただきます。南丹地域の皆さん、京丹波の皆さんも元気よくぜひ手を挙げてください、最後のお一人となります。

はい、どうぞ。お二人挙がりました、厳しいですね、どうしましょう。

じゃあ、後ろの方、くるくる手を振ってらっしゃいますので後ろの方にお願いします。

○発言者４　南丹市の方から見えました吉富村という手づくり市をしております、国道９号線沿いで。それから、工場の方で支援金をいただきました平成 19 年、山田啓二知事様、どうもありがとうございます。

府のそういう方針があるのを知らなかったもので個人の出資で立ち上げましたところ、同級生３人と手づくり市をしようということで、地域の産物、手づくり加工品、手づくり布製品などを、手づくりのものを販売しております。月一度、第２日曜日、吉富駅の近くで、吉富村という名前で出させてもらっております。自分の資金で、借金をしましてやり出したところ、回覧が回りまして、偶然目に入りまして要望をいたしましたところ、支援金をいただきまして、本当にありがたく、涙が出るほどうれしく思っております。京都府の方針と私たちの地域の考え方が本当に一致したということで、本当にうれしく思っております。活動を続けていきたいと思っておりますので、これからもどうぞ支援の方、よろしくお願いいたします。

皆様どうぞ吉富村へお越しくださいませ。ありがとうございます。失礼しました。

○司会　ありがとうございました。ＰＲも入っております、これはこれで。

○山田啓二知事　本当にそういうのを支えていくのが我々の役目やと思ってまして、みんな頑張って元気に地域で働いて暮らしていく人たちを支えるのが、僕らの行政の一番大きな役割やということでこれからも頑張っていきたいと思いますので、ぜひとも頑張ってください。

○司会　南丹市長も、よろしかったら一言お願いします。

○佐々木稔納南丹市長　ありがとうございます。吉富村頑張っていただいております、私からも、高いとこからではございますが、お礼を申し上げます。

今、京都府の制度があったのを知ったというようなことで、私どもも、どういった形の御支援といいますか、いかに力を合わせてできるのかというのは、京都府さんもいろんなメニューをつくっていただいております。私どもも、そういった御相談に乗る中で、またそういった制度の構築、また力を合わせてやれるような方途の探り合い、こういったことをまさに市民の皆様方とともに考えていきたい、やっていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

どうしましょう、せっかく手を挙げておられるので、３部のパネルディスカッションの皆さん、ちょっと嫌な顔をされてますけど、いいですか、よろしいですか。

じゃあ、短めに、最後になります。じゃあ、お願いします。

○発言者５　亀岡の、ＮＰＯ法人青空ふれあい農園・ハーブ倶楽部の代表をしております。

京都府さんには、19 年度、21 年度、今年度も地域再生のプロジェクト交付金をいただきました。ありがとうございます。

知事さんも知っていただいてるように、クイールサブレ、亀岡の米粉を使い、私たちがつくったハーブを中に入れて、そして盲導犬のクイールをつくりました。これを、私たち高齢者が、生きがいを持って、元気で長生きをして、社会貢献をしたいという、そういう本当に思いを持ってこの製品ができました。２年半ほど前にこれを開発したんですけれども、私とこのパートナーの方と、私が 35 年前に亀岡で朗読ボランティアを立ち上げたことがきっかけで、映画会社とかそういうとこら辺の皆さんに許可をいただきまして、クイールという固有名詞をいただきました。

今までハーブティーをつくって売ってたんですけどなかなか売れないので、京都府のワーカーズ支援事業というのも支援していただきまして、売れる商品づくりをしなさいということで、２年前これを開発し、今やっといろいろ、最初は女性起業家の方につくっていただいたりしてたんですけども、今度、加工場ができました、21 年度の交付金で。今度、30 日にオープンする予定です。

そして、高齢者が、私は亀岡も本当に大好きで、私は亀岡生まれ、亀岡育ちで、61 年過ごしてきたんですが、やっぱり亀岡の緑、自然、そういうものをもっと生かして、そういう農園で、今は本当に小さなデイサービスというか、生きがいデイサービスなんですが、

もっと施設へ行くデイもいいですけども、やっぱり農園というのをもっと活用して、植物から人間の生命、生きる力というものをもっと活用して、今、そういう研究がかなり進んでいて、特養などにも採用されていくという話も聞いておりますけども、どんどんそういう、箱物の中だけではなく、自然の中で伸び伸びと、やっぱり今まで暮らしてきた、そういう生活を余り変えることなくお年をとっていく、また亀岡のよさを本当に生かしていくような、そういう高齢者の過ごし方を考えていただけないだろうかと思いますし、このクイールサブレを、今度、全国発信って大げさなこと言ってるんですが、大分不安があるんですけど、やっぱり亀岡市の方も応援していただきたいし、市長さんもよろしくお願いしたいと思います。

○司会　いかがでしょうか。

○山田啓二知事　地域力再生は本当に、市長さん、町長さん方と一緒になって応援させていただいているものなんですけれども、でも、こうやってこの南丹で府民交流会やって、本当に女性の方々や高齢者の方々が、こうして積極的に発言をして頑張ってらっしゃる姿を見ると、やっぱり次の一つの方向性がまた見えてくるような気がしまして、生き生きとした地域社会づくりの、我々は逆にいい勉強にきょうはなったなという気がしております。ありがとうございます。

○司会　ありがとうございました。

本当に 20 分という短い時間でございましたので、皆様の意見を伺いたいところなんですが、そろそろ、時間が過ぎてしましました。第３部の皆さん、御迷惑をかけております。

引き続きまして、この後、南丹パートナーシップセンターオープニングイベントを兼ねました、第３部のパネルディスカッションを行います。

会場の皆様、それでは第２部終了いたします。どうもありがとうございました。

それでは、会場準備のため、いましばらくそのままでお待ちください。二、三分で会場のしつらえを変えさせていただきます。

会場の皆様からの熱い思いが伝わってくるような皆様からの意見交換ありがとうございました。

この後は、第３部のパネルディスカッションでございます。

先ほども皆様に御案内いたしましたが、きょうお渡しいたしました袋の中に入れさせていただいたアンケート用紙、どうぞ御協力をお願いいたします。忌憚のない御意見をお書

きいただきまして、アンケート用紙、お帰りに箱の中にお入れいただきますようにお願いいたします。

間もなく準備が整いますので、そのままでしばらくお待ちくださいませ。

さて、第３部、間もなく始めさせていただきます。どうぞ皆様お席にお戻りくださいませ。

さあ、それでは、皆様に壇上にお上がりいただいております。

ただいまから、第３部のパートナーシップセンターのオープニングイベントを兼ねました、パネルディスカッションを開催いたします。

本日、オープンしました南丹パートナーシップセンターは、ＮＰＯを初めとします地域活動団体の協働、協力して働くと書きます、協働・交流・相談拠点として、亀岡市と協調してオープンした施設ですが、本日は、この南丹地域で活躍するＮＰＯなどの皆さんにパネリストとして御参加いただき、地域の協働のあり方、また、南丹パートナーシップセンターに期待することなどを熱く語っていただきたいと思います。

さあ、皆様に御登壇いただきました。改めて御紹介いたします。

まず、山田啓二京都府知事です。

続いて、保津川の環境美化活動を初め、昨年は、60 年ぶりにいかだ流しを実現したＮＰＯ法人「プロジェクト保津川」代表理事の坂本信雄さんです。小さな社会の男女共同参画の確立を目標にした活動を初め、最近では、都市農村交流を目指した取り組みを進めておられます「亀岡発平成ヨメ学」代表の中島三羊子さんです。南丹でものづくり活動を通じた地域起こしの事業に取り組んでおられるＮＰＯ法人「京都伝統工芸活動支援会京都匠塾」代表の高橋博樹さんです。自閉症などの発達障害をかかえる子供たちを支援するＮＰＯ法人「発達障害を考える会ぶどうの木」理事長の中西　興さんです。今や京丹波の冬の風物詩となっている琴滝の冬ほたる事業に取り組むＮＰＯ法人「丹波みらい研究会」代表の岩崎栄喜雄さんです。

さあ、そして本日の最後のパネルディスカッションのコーディネーターを務めていただきます、自然をフィールドにさまざまな自然教室やキャンプ活動の取り組みを展開されているＮＰＯ法人「芦生自然学校」理事の鹿取悦子さんです。

さあ、それでは、ここからはコーディネーターの鹿取さんにお願いいたします。

それでは、よろしくお願いいたします。

○鹿取悦子　御紹介に賜りました鹿取と申します。よろしくお願いいたします。

私の方から簡単に自己紹介させていただきますけれども、私は、ＮＰＯ法人芦生自然学校と言いまして、南丹市の奥座敷、美山町のさらにその奥というんですかね、由良川の一番奥の地域で活動しております。由良川最上流の家が自然学校の理事長の家なんですけれども、そういったところをフィールドにして、カヌー、ラフティングといったアウトドアスポーツや、それから山や川で、虫とか、魚とか、植物とか、そういったものを自然観察したり、それからスタッフがそれぞれ農業とか林業、それから猟とかにかかわっているので、それを活動の中に盛り込んで、地域の文化とか、それから自然の、かなり自然環境も随分変化して悪くなったりしているんですけれども、そういったことを子供たちに教える活動をしています。それから、山の中にあるキャンプ場でキャンプして、鳥をさばいたり、魚をとったり、それを食事として食べるという、割とワイルドな活動をして、2004 年から始まっているんですけども、そういうことをずっとやってきているところです。そんなところを紹介させていただきました。

そうしましたら、それぞれの今御紹介いただいた方々の活動内容を順番にお話していただきたいと思います。

まず、坂本さんの方からお願いいたします。

○坂本信雄　プロジェクト保津川は、一昨年７月にスタートをいたしました。その後、年明けの昨年３月、ＮＰＯ法人になったということで、比較的新しい団体でございます。保津川の清掃を毎月きちんと行ってるということでございますけれども、このほかに、環境教室とかシンポジウム、そして最近取り組んでいるのではごみマップ、インターネットのグーグルを使いまして、グーグルの地図にごみの散乱状況、ごみの状況を写メールとかで写していただいて、それを張りつけていただくと。これは、デジカメでもよろしいわけですけれども、最近では、多くの方は携帯に写真機能をつけていらっしゃいますので、容易に携帯電話の写真でその状況を写していただくと、若干の編集が必要になりますけど。

こういった取り組みは、日本でも幾つかの団体がやっておりますけれども、私どものグーグルマップは、多分、他の地域でもこれから利用できる非常に汎用性が高いということで、恐らく利用が、今後、注目されるのではないかというふうに思っております。

とりあえずの状況までです。

○中島三羊子　こんにちは。亀岡発平成ヨメ学の中島三羊子と申します。

活動を始めまして 14 年目に入りました。先ほどおっしゃったように、男女共同参画というかたい内容でスタートしたんですけども、14 年間いろいろなことをやってきておりまして、今一番力を入れているのは、それこそ、ここ知事さんおいでになりますけども、京都府の地域力再生プロジェクトの助成を受けまして、20 年度、ことしもオーケーしていただきまして、休耕田を耕作放棄田にしない活動というのをやっております。

てふてふふぁーむと言いまして、てふてふ、わかっていただく人おいでになります、多分わかってもらえると思います。うちのしゅうとが、ありがとうございます、手挙げてくれはりました。孫に手紙出すときに、毎年春になったら、てふてふが、チョウチョですよね、てふてふが飛ぶようになったから帰っておいでやいうて手紙をくれまして、この活動を始めたときに、チョウチョ、皆さん方が、自然や里山の保全や休耕田にしないことやいっぱい考えるためにこのふぁーむへ集まってきていただくために、チョウチョを皆様方に例えて、みんなに来てもらおうという活動を始めました。それと、家族に車いすで生活する、障害者ができましたもので、その人たちと介護をする人が心のいやしになるようにバリアフリーの農園を、それを売りにして申請を出して、通していただいたんですけども、それが一番難しいんです。

それで、活動をしてて一番思ったことは、自分の農地を使いながら田んぼとして登録してあるがために、スロープをつけるのに、セメントですか、コンクリートを流したら一番簡単にできるんですけども、農地はそれがだめなんですよね。ただ、そうした形でもやりながら休耕田を放棄田にしないための活動をしている人たちには、少しそういう制度を知事さん何とかなりませんでしょうか。

それと、山ですけども、山も、この間、京都府さん新聞で見ましたけども、里山の保全もいろんな方法を考えてくださってるみたいですけども、大きな企業さんが入っていただくモデルフォレスト、あれもとても大事なことやと思いますけども、小さな高齢者がもう山へも入れないような、嫌でも荒れていく山がいっぱいあります。そういう山の持ち主が少しでも自分の山をまた活性化するような、そういう手だてもまた、亀岡市さんも、京都府さんも、行政の方で少し目を向けていただけたらどんなにうれしいかなって、これが今まで活動してきた素直な気持ちでございます。

よろしくお願いします。

○高橋博樹　ＮＰＯ法人京都匠塾の代表をしております高橋と申します。よろしくお願いし

ます。

最初に、京都匠塾という名前を聞いたことがある方、あるいは活動を御存じの方、手を挙げていただけますか。

かなりの多数の方が挙手いただきましてありがとうございます。毎回こういう席に来ますと、まず最初にこれを聞くことにしております。というのは、どれほど説明したらいいのかというのをこちらが知るためなんですけども、だんだんふえてきてうれしく思っております。

匠塾も活動を開始しまして４年目になっておりますが、大きく三つの視点で活動をしております。一つは、もちろん名前のとおり、伝統工芸の業界の活性化ですね。我々は、基本的に京都伝統工芸大学校という学校が南丹市園部町にあるんですけども、その学校の卒業生たちが中心になって、私もそうですが、工芸業界が、とにかくその学校を卒業して、皆が技術を身につけて卒業しても、なかなか就職口というのがそう簡単にないということで、自分たちで道を切り開いていかなければならないんじゃないかということで活動を開始したわけです。ですけども、それだけで何とかなっていくような甘っちょろいものではなくて、もっと根深いところから何か畑を耕していかなければいけないんじゃないかということで、まちづくりという視点、それともう一つ教育という視点と、それを組み合わせながらやっておる次第です。

一つ目に工芸の話ですが、もう一つのまちづくりという話でいきますと、我々は、地域の、園部町の中の本町という旧街道の商店街のところに、一つの工房、拠点を構えさせていただいてまして、共同工房で、卒業後の職人たちがそこで活動しておるんですが、それとともに、地域の住民の方、商店街の方々と連携してさまざまなイベントをして、少しでもその通りのシャッターをあけようじゃないかということ、短期間でもいいし、もちろん長期になればもっといいんですが、シャッターをあけるということをして、お祭りをしたりとか、あるいは子供向けの何かイベントをして、地域に若者たち、あるいは子供たちを呼んでくる。当然、そのときには、学生たち、我々の後輩に当たる、京都伝統工芸大学校の学生たちを引き連れて、そういうイベントに参加するということをしております。

もう一つ、教育という視点ですが、これは我々が最終的に業界の活性化を目指したときに何が必要かというと、いいもの、悪いものを知ってもらう目が必要だということを思ったわけです。大人たちはもう自分たちの価値観ができてしまっています、手おくれです。

僕たちが目をつけてるのは子供たちです。長期的な視点で考えたときに、子供たちにできるだけ早く、100 円ショップで売ってるものと工芸品とどこが違うのかということを知ってもらう。何がいいものなのか、よくできてるものなのかを知ってもらうことが大事だということで、子供向けの教室をたくさん開催させていただいてます。それは、ものづくりの楽しさというのを教えようというのももちろん一つの大きな目的ですけども、難しさを知ってもらうということも大事だなと思っています。つくるの難しい、そしたらよくうまくできてるのといったら何がうまいのかということが初めて感じてもらえると思うんですね。そういうことをしております。

最後に、ちょっと宣伝ですが、今現在、活動の一環として展示会をしております。京都駅ビルのホテルグランヴィア京都のフロントロビーのあたりで、「萌ゆる芽 2009」ということで我々の展示会をさせていただいてます。８月末までやってますので、ぜひ見ていただいたらなと思います。

それともう一つ、つい最近、アンテナショップとして京都市内の北区紫竹というところに工藝百職というお店もオープンしましたので、ぜひ行っていただけたらなと思います。よろしくお願いします。

○中西　興　皆さん、こんにちは。ＮＰＯ法人発達障害を考える会ぶどうの木の中西でございます。よろしくお願いします。

私もちょっと聞いてみたいんですが、皆さん、自閉症とか発達障害とかについてよくわかるという方いらっしゃいますか、よく知ってるという方。

ありがとうございます。

最近、自閉症とか発達障害とかよく言われるようになりましたけども、マスコミとかでも、余りよくみんなが知ってるというところまではなかなかいかないと思います。私も最初そうでした。

私たちいろんな活動をやってるんですが、その根拠は何があるかというと、山田知事、京都府の起こしはった事業の中に私たちができた根拠があるんですね。

それは、南丹保健所が乳幼児健診から発達クリニックという南丹モデルという事業を始めはりました。早期発見、発達障害の子を早く見つけて早く療育することで、小学校に行くときには普通学級に何とか行けるように頑張っていこうという事業が始まったんです。そしたら、２歳児健診とか３歳児健診でたくさん、言葉の出えへん子、おくれのある子、

そういう子が見つかります。ちょっとおはしが持ちにくい子、友達と遊ばれへん子、いっぱい出てきます。本当にたくさんの方が出てきてはるんです。

そしたら、出てきはったんはいいねんけども、じゃあ、今度どうしたらいいねんというところが、次なかなか難しいんです。じゃあ、花ノ木さん、花ノ木って亀岡にあるんです、花ノ木さん行ってください。行くと、60 人待ってくださいねとか言わはるんですね。じゃあ、４カ月先ですよ。５歳になって４カ月先ですよと言われたら、例えば５歳になって、６歳になって、６歳の９月に４カ月先ですよと言われたら、自分の進路どないしたらいいんやろうと、こうなるわけです。もうすぐ小学校に行かなあかん、今私どうしたらいいかわからへんけど、先生が見てくれはるまでわからへん、そういう方がたくさんふえてきました。

そして、そんな中で、南丹保健所の進めで、じゃあ、皆さん、親の会をつくったらどうやというて、健康室長のｻﾄｳさんという方がいらっしゃいますが、進めで親の会が 17 年にできました。みんな今まで自分一人で抱えてた悩みを話し合うことができる、すばらしいですね、共感するお友達ができた、まずすばらしい、そういう活動ができました。

私もそんなことで、一遍そこへ見に行ったんです、訪ねさせてもらいました。私、何も全然そのときまでは関係なかったんですが、そこに訪ねさせてもうたら、そこで皆自己紹介して泣きはる。幼児健診でうちの子が発達におくれがあると言われて、この先どないしたらいいんですか、切実な思いで涙しはる。それを見たときに、２歳でまさか人生が決まったように思って悲しまなあかんのはどうやろう、これはこの人たちのために何とか手を差し伸べてあげて、みんなで元気に頑張って、これからの先長い人生があるわけだから、それを乗り越えていかなあかんのに、頑張っていこうと。与えてもらうんじゃなくて、みんなで何かしようと、同じ苦しみや悩みのある人がおらはるから、そういう人たちのために何かしようと、みんなのためにしようと、自分の子供がしてもらうんじゃなくて、みんなのために何かしようということを提案して、ＮＰＯ法人に去年なりました。それで、発達支援講座とかいろんなことを今進めさせていただいておりますが、ことしの５月から、南丹市と一緒に事業を興しました。私たちの活動が南丹市にも、佐々木市長や、また福祉事務所のｶﾂｶ部長を初め、南丹市の皆さんに御理解いただいて、中西さん一緒にやろうやないかと言うていただいて、事業があるので私も手を挙げさせていただいたんですが、一緒にやろうと。

そして、私はここで一ついいなと思うのは、民間またはこういう市民団体と行政が一緒になってよいものをつくろうと、ここが目指すとこでございます。よいものをつくろう。僕らの福祉はお金は要るばっかりで、そこから生み出すものがないからどうしようもないんです。だけど、よいものをこしらえて、それでそこからまた人材育成とかいろんなことで町に返していったらいいんじゃないかなと私は思っております。

また、この私たちの活動、南丹市と一緒にやっとる活動は、また、この南丹圏域２市１町の皆さんにも御利用いただいたりできるように何とか頑張っていきたいと思いますので、どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○岩崎栄喜雄代表　皆様、こんにちは。ＮＰＯ法人丹波みらい研究会、岩崎いいます、よろしくお願いします。

私は京丹波町でＮＰＯ法人をやってるんですけども、名のとおり大きく丹波みらい、未来を考えるという、行政さんとともにやりたいと思ってるんですけども、やる中で行政さんのできないこと、民間でしかできないこと、それを何とかしたいなというメンバーが五、六人おりまして、これは暇もあって、40 過ぎて、ＪＣの方も終わり、消防団も終わり、何だかんだとその中で、何か地域に貢献できるようなことをやった方がいいんじゃないかということで、五、六名でつくり、今、ことしで７年になりましたけど、７年目で 21 名のメンバーができました。親としても、やはり子供の未来のこともある中で、この地域を何とか生き生きとした町にしていきたいという思いを、願いを込めて、それが子供のためでもあるという思いがありまして、まず、観光地をこの丹波でつくり、そこに人に足を運んでいただこう、まずそれが琴滝というとこですけども、この琴滝というところをターゲットにいたしまして、いろんな確かに京丹波市には名勝がございますけども、まずーとこに集中をいたしまして、その琴滝をメーンに持っていこう、観光地にここをしていこうという思いで。

ですけども、確かに田舎ですので、資金源がございませんのでどうしようかなと。春の桜ということも大したことないし、夏の花火といっても、そう財力がないので大したことできません。でも自然だけは負けない、空気の美しさも負けない、本当に星でも透き通るように輝いておりますけども、それは私は京丹波だなという思いで、京丹波が好きで今もおりますけれども、だったら、この冬の寒い寂しいときに何かをしようということで、冬ほたるというタイトルで 12 月 10 日ぐらいから 10 日間、24 日まで、クリスマスイブま

でそういうイベントをしておりますけども、このイベントといいますのは、他のイベントをするためにみらい研究会やなくて、イベントをすることによって人を動かす、人に感動していただく、そして元気を持って帰っていただけるようなことができればという思いで、私たちがさせていただきました。

そして、財源がないので、まず６万球ぐらいでやりますと、自然と光のコラボを琴滝で、そんなんもやるとお化け屋敷になるんやないか、だれがあんなとこ行くのというようなこともいろいろ言われる中で、村の人が遠くから眺めるぐらいであって、協力はしていただけませんでしたけども、そんなばかなことをと思いながらも、我々はいろんな意味持ちながら、よし、見とけと、ここをお化け屋敷には絶対しないぞという思いで、21 名のメンバーがかたく心に築き上げるもの持ちながらやる中で、６万球が２年目で 12 万球、３年目で 20 万球、４年目で 35 万球、ことし５年目に入りますけども、ことし５年目で 45 万球の光を放つことができますけども、やはりこの光というのは、一人一人の光が 45 万球の輪ができてこの 45 万球ができたと私たちは思っております。本当にありがたく思いますけども、この５年目の節目に、本当にこれでまた皆様に元気を、そして我々にも元気をいただけるようなまちづくりが、この光でできればおもしろいことができないかなというふうに思っておる丹波みらい研究会のメンバーでございます。今後ともよろしくお願いいたします。

○鹿取悦子　そうしましたら、山田啓二知事の方からコメントをいただきたいと思います。

○山田啓二知事　それぞれ本当にすばらしい活動内容を聞かせていただきまして、改めてやぱり私どもも、地域力再生を初めとしていろんな事業に取り組んできてよかったなという思いを持っております。

一番やっぱり感じるのは、行政の活動と、それから府民の皆さん、市民の皆さんの活動の性質の違いというのをやっぱりすごく感じるんですね。僕はどちらがいいとか言う気はないんですけども、その性質の違いを考えていかないと、これからのまちづくりや地域づくりはないと思います。

といいますのは、一つは今までのお話がありましたように、鹿取さんの話もそうですし、何というのかな、子供の教育から、環境問題から、さらには地域の活性化まで、坂本さんの保津川の方も、ごみの問題からさらに地域の活性化まで幅広くやっていくし、また中島さんのお話も、休耕田の利用から障害者の話まで広がっていってる、高橋さんの方のお話

もそうですよね、高齢というものから、シャッター、商店街の問題まで幅広く広がっていってるわけですね。

こうした活動というのは、いわゆるジャンルがない、境目がないんですね。まさにいろんなところを横断的に、本当の需要に応じて育っていっている。これは、行政の活動というのはどうしても、市町村だろうが、都道府県だろうが、これは大きくなればなるほどジャンルに分けられてしまうわけですね。一番典型的なのが国で、例えば中島さんのお話だと、休耕田やってるのは農林水産省ですよね、それから障害者だったら厚生労働省で、この二つが一緒になって何かやることはまずないですよね、全然あり得ない。これが一番問題の一つなんですけれども、ただ、それぞれ専門性は持っている。しかし、市民レベルの活動というのは、そこの境目も意図もたやすく超えて地域づくりという全体の中でやっている。

それから、中西さんや岩崎さんのお話を聞いてわかりますように、そうしたものが、今度は自己増殖をするというのか、どんどん輪を広げていくことができるんですね。これも、絶対、行政の活動では余りあり得ないんですよ。行政がそんなふうにどんどん大きくなってしまったら困ってしまいますわね、職員どんどんふえちゃったみたいなことになってしまうだけの話なんで。そうではない、市民活動は、どんどん輪が広がっていって大きくなることができる。つまり、境目もなく、大きくなることもできる運動。これが、やっぱり市民活動の一番いいところであり、すごいところじゃないかなというふうに、僕は直感と申しますか、今聞いてて感じました。

だから、やっぱりこの特徴を生かさなければ、今、日本は安定成期に入ってるわけですよね、人口はどんどんふえるわけじゃない、どんどん税収が伸びていくわけでもありませんからね。ますます高齢化率は高まっていって、あと何十年かしたら、３人に１人は 65 歳以上ですよ、65 歳以上を高齢者と言うのもおかしいですよね、３人に１人ですから、せいぜい若年者、中年者、高齢者と分けていくだけの話ですよね、それだけの話になってしまう時代です。ここは全く昔と違うわけですよ。昔は、高齢者って、65 歳以上の人口といったら、五、六パーセントしかいなかったわけです。そんな年寄りの人いなかった。日本はやっぱり高齢化の時代に入りましたから、今や平均寿命は 80 歳ですよ。

私がこの前も言ってるんですけれども、ロシアのレニングラード州が、京都府の姉妹都市ですけれども、行ったのが五、六年前だからちょっと変わったかもしれませんけど、私

はレニングラード州サンクトペテルブルクに行ったときに聞いたときに、そのレニングラードの平均寿命が 56 歳ですよ。私の年齢だと、あと１年で死んでしまうことになるんですけど、そのぐらいですわ。ということは、全く日本の７掛けの世界。こういう言い方をするとロシア人に怒られちゃうかもしれないけども、日本人の 70 歳はロシア人の 49 歳と一緒なんですよね。そういう世界で行ってるときに、境目をつくってしまって、分業化してしまって、しかも広がらない世界でやっていったら、それでこれからのいろんな地域の問題に対応できるかというと、それは難しいと思うんですよね。

だから、行政がやるところの分野というのは、一つは、そういう活動をしてる人を支えていくというところと、それからもう一つは専門的なところを生かしていって、きちんと専門的な処理をしていくこと。

中西さんところで、早期健診、２歳児健診、３歳児健診、今、５歳児健診までやってますけど、これも確かによしあしというのがありまして、昔、私どものとこでいったら、必ずやっぱりクラスの中に何人か授業に集中できないおっちょこちょいの子がいたわけですよね。いつ見てもよそ見してて、何か窓の外ばっかり見てるみたいな話が、窓際のトットちゃんみたいな話もありましたけども、ああいう子は必ずいた。それは、別にあのころは普通だと思ってたんですけども、今、よくやってみると発達障害の場合がある。

ここを二つ間違っちゃいけない点があると思うんですけれども、一つは発達障害というのは、できるだけ早期にケアをしていくと本当に普通の生活、普通のあれができるということですね。そういった面では、できるだけきちっと最初から手当てをしていく必要があるという。

それと同時に、発達障害が何かいけないことみたいになってるんですけども、これ一つの特徴なわけですね。これは、本当かどうかはよく知らないんですけども、アメリカの有名なコンピューター関係の人は、まさに発達障害、もしも分類すれば発達障害なんだけれども、それが一つの特徴となって大成功をした、天才ですよね、という例もあるわけですから、それが何か悪いことみたいに思われては困る。ここの区分のことの中で、我々はやっぱり専門的にうまく治療できる部分は治療をし、その子供の個性を生かす部分は生かしていくという方策をとっていかなきゃいけない。

だから、京都府も発達障害児の支援センターつくって、割と早目からそちらの部分をやっていったわけですよ。ここがまた難しいんですけど、そうすると、みんなそこに殺到し

ちゃうわけですよね。ひどいときになると、まだ４カ月待ちはよかった方で、最初は２年待ちとかもありまして、２年たったら成長しちゃうじゃないかという話があるんですけども。しかも、最初に京都府がやったら、ほかの府県からも来ちゃうわけですよ、大阪とか、そこら辺からいっぱいみんな来てしまうわけですね。そうなってきてしまうと、よっぽどみんなで助け合っていく部分は助け合って、個性を生かして、その子たちを伸ばしていけるようなところというのは、専門家でなくてもお互いにみんなで面倒を見合っていける部分があるわけです。そうしたところで、まさに中西さんたちの活動というものが、本当に大きな輪になって広がっていく価値が出てくるわけですね。行政だけでこんなことをやったら、本当にこれも、私、正直に言ってなかなか難しい。

○佐々木稔納南丹市長　知事、済みません、挟んで済みません。おかげで、南丹市には子育て発達支援センターというのができました。

○山田啓二知事　できましたね。

○佐々木稔納南丹市長　またそこでも、市長を初め、福祉部の皆さんが頑張ってますので、すごい進んだことになったなと思うんですよ。

○山田啓二知事　そうしたものがコラボレーションの中で進んでいくんですよね。単に何か全部行政がやっていくんじゃなくて、こういうコラボレーションが出ていくことによって広がりが出ていく。そして、そのまた市民活動の皆さんを私たちが支えていくことによって我々行政も前に進むことができるという、本当に両方が一番いい関係ができるというのが、多分、これからの地域社会のあり方じゃないかという感じがしています。

　ですから、よく僕に言われるときがあって、ううんと思うときがあるんですけれども、地域力再生やってるとか、そうやって市民活動を応援しているというと、行政が行政としての義務を逃げてるんじゃないかと言われるときがあるんです。全部何か行政が合理化、効率化するためにそこを逃げちゃってるんじゃないかという話をされる方もいらっしゃいます。でも、僕は絶対それは違う。さっき言ったように、シームレス、境目がなく、幅広く輪が広がっていく活動をこれからの時代につくっていかなければ、地域というものが生き生きと暮らせないじゃないですか。一人一人がつながっていってお互いに支え合っていかなければ、みんな行政がやっていくという世界は、まるで何か他人の家に住んでるみたいな世界になってしまって、それじゃあやっぱり自分の家じゃない。

　だから、行政との中でそうしたものをやっていくことが、僕は一番これからの地域にと

って必要じゃないかと。その点で地域力再生の活動を、きょうおいでの市長・村長さんと一緒にやってきたというのは、絶対間違いやなかったなという思いを、今のまず、とりあえず５人の方の、鹿取さんも含めてですけども、聞いて感じました。

○鹿取悦子　ありがとうございます。

時間も余りありませんけれども、こういった活動の話聞いてますと、本当に頼もしく思うところもあったりして、私も大変聞いてよかったなと思うんですけれども、その中で活動のいろんな、これからこうしたらいいとか、こうしていきたいとか、これが足りないとか、本日オープンした南丹パートナーシップセンターに、何を求め期待するのかといったことなどを、時間の関係で手短にお願いしたいと思います。どなたからでもおっしゃってください。

○坂本信雄　きょうはせっかくの機会でございますので、具体的に二つのことを御相談させていただきます。

各団体とも、やはり活動資金にかなり困ってる状況だと思います。私どもの団体も、会費収入だけではどうもうまくいかない、勢い、行政の方に何かいい補助金などはないかというまなざしが出てくるわけでありまして、実際にも、この２年ほど地域力再生事業をいただいてるところでございます。

しかし、考えてみますと、こういった行政に依存することが、あるいは税金を集めたものを配分していただくやり方が市民団体にとって果たしていいのかどうか、ここはよく考えてみる必要があると思います。やはり市民団体は、できるだけみずからの手で自立していくという方向がいいわけでありまして、そういう意味では、寄附というものの制度、あり方を、この際、考える段階になってるのではないか。ＮＰＯ団体ですと、寄附そのものの優遇税制は全くないわけですね。認定ＮＰＯ法人になって初めて寄附控除が出てくる。一般の市民から例えばプロジェクトとかに寄附をいただくと、寄附された方は何らかの戻りがあるということになるわけでして、京都府内でも、全体で 950 ぐらいのＮＰＯ法人があっても、わずか４法人しか認定ＮＰＯ法人になってないと。これは、国のあり方そのものになってるわけですけども。

私が具体的に検討していただきたいなと思うのは、認定ＮＰＯ法人の手続が非常に煩雑、ハードルは若干下がってきてますけども、煩雑なもんですから、この際、府の方で業務代行サービス的なことができないのかどうかということが１点でございます。

２番目には、認定ＮＰＯ法人は、所得税と住民税が連動して控除になってくるわけですけれども、自治体が単独で、つまり住民税だけを寄附控除の対象にできないかという検討であります。名古屋市長さんは、住民税を引き下げるという、非常に大胆な提案をされております。地方税法の解釈が、多分弾力的になってきてるということを考えますと、この際、住民税だけでも寄附控除ということが具体的に検討されていいのではないかということを申し上げたいと思います。寄附社会、これは地方分権と極めてかなってるわけでございますね。地域のことは地域、自分たちのことは自分たちでしましょうということと対応させて考えますと、これは、税で集めたものをもう一回配分してもらう、地域再生のｸﾐﾀｲ、そういうやり方よりも、市民の方、府民の方が思う、例えばよくやってる団体に直接寄附していただいて、その結果として戻りがあるという仕組みの方が、広く、薄く寄附が集まるということになっていくわけですので、ぜひ知事さん、そして市長さん、町長さんにその辺を検討していただきたいということで、申し上げさせていただきます。

○鹿取悦子　特にコメントは、多分この場では。

○山田啓二知事　全部受けよう、それから。

○鹿取悦子　そうですね。

そしたら、どんどん御意見をお願いします。

○中島三羊子　本日、京都府南丹パートナーシップセンターがオープンいたしまして、亀岡ＮＰＯ情報センターも亀岡市民活動推進センターという名前に改めまして、二つが一緒になって出発いたしました。今、隣に座っていただいてる坂本先生は、亀岡市の方のアドバイザーでいてくれはります。皆さん、今お聞きになりましたように、とても頼もしいいろんな専門知識をお持ちになっておられます。どうぞガレリアかめおか３階にあります両センターへお越しいただきまして、皆さん方の活動に役立つ方法を随時お持ち帰りいただきたいと思います。それと、水曜日でしたかね、済みません、はっきりしてませんで、京都ＮＰＯセンターから専門のコーディネーターさんにおいでいただきます。だから、私たちが窓口で皆さん方に対応するより以上の専門的な知識を教えていただけます。そして京都府の方からもコーディネーターさんを入れていただきます。その方はその方でまた違う知識を持って対応をしていただけますので、今まで亀岡市民さんが対象でしたけども、これからは南丹地域の皆さん方、そして亀岡市民と南丹地域の皆さん方が、それぞれの活動をもってネットワークを結んでいただきまして、そしてそれぞれの活動の上に役に立つよう

な両センターに発展させていくべく、運営委員会とパートナーシップセンターの運営協議会の皆さん方、頑張ってまいります。どうぞ皆さん、このセンターは使わないと損ですので、どんどん活用していただきますように。ただ、私、運営委員長という立場上から、どうぞ皆さん方のお越しをお待ちいたしております。絶対役に立つセンターですので、どうぞ皆さんお越しいただきますように。これは、山田知事も必ず後押ししてくれはるセンターですよね、お願いいたします。

○高橋博樹　先ほど坂本先生のお話のとおり、私どもも、本当に行政の方にずっと頼りっ放しではなくて、自立した組織運営をしていかなければいけないということをずっと念頭に置きながらやっておるんですけども、地域力再生プロジェクト、ことしで３年目ですけども、３年間ともずっとお世話になりましてありがとうございました。それがなければ本当に我々の組織はこんなにたくさんの活動ができなかったので、その点については非常にありがたく思っておりますが、本当にそれにずっと頼ってて組織運営をしていってはいけないなということは、僕の方はずっとそう思ってます。それとともに、我々は、若手職人たちが何とか活動をしていこうということをやっておりますので、自分たち、若者のこの世代で道を切り開いていかないといけないと。既につくられたいろんな社会の基盤であるとか、組織、行政も含めてですけども、そのレールの上に乗っかった状態で必ずしもやってて、そこに縛られてるからいろんなことができないと言ってるのは言いわけだと僕は思ってます。じゃあ、できないなら自分たちでつくっていけよと思ってますので、その道を何とか自分たちでやっていきたいと思ってますが、ひとつ、今も地方分権という言葉が非常に加速して、そういう動きになってますが、知事、ぜひ早く進めていただきたいなと思っております。

　というのは、我々の活動は、先ほども言いましたように、行政の方との連携でずっとさせていただいてたんですけども、特に南丹市さん、あるいは京都府の南丹地域、南丹広域振興局さんと非常に密に連携をさせていただいて、いろんなことをさせていただいてますが、やはり小さな行政と言ったら失礼かもしれませんが、より地方に行けば行くほどすごく温かみを感じるんですね。ここにお座りの佐々木市長さんなんかも、市長ですけども、失礼ですが近所のおっちゃんなんですよね、という意味で非常に気楽にお話もさせていただけますし、南丹市の行政のほかの職員の方も、非常にいつも温かく接していただいてると。ただ、我々、性質上、国と連携してやるプロジェクトもありまして、そのときに国の

方にいろいろ資料なんかの話で問い合わせると、まず団体番号を言ってくださいと言われるんですね、２７６０５０と言うんですね。それで何か協働やねんと僕は思うんですね、番号化されてるわけですね、僕がね。そういう状態で非常に国のやり方というのが、そちらはそちらで事情があると思うので、全国一律にやらなければいけないという。下手をすると、京都府の本庁の方が、もしかすると、ややもすると、その国のやり方に倣ってしまう可能性があるんじゃないかと思って心配をしておるんです。どんどん地域に行けば行くほどより身近に感じられる、こういう状態であれば、我々は協働をしていきやすいなと思ってますので、そういうふうにしていく方向に進めばなと思ってます。

もう一つ、このパートナーシップセンターについて、ひとつお話、意見があればということですので、させていただくと、もう一つの最近のキーワードで、先ほどからもお話が出てましたように、世代間交流ですね。子供たち、あるいは学生、それと地域の大人たち、行政というのが、どれだけ縦に連携できるのかということが非常に地域力をアップする上で重要なキーワードじゃないかということで言いますと、この南丹パートナーシップセンターも、大人たちだけで考えていてはいけないんじゃないかと思います。ですので、学生をどんどん呼び込む工夫をするであるとか、子供たちが気楽に出入りできる、子供たちの意見が聞けるというような場所にしていったら、そこから大人たち、その親たちに広がっていく可能性もあるんじゃないかなと思います。

以上です。

○中西　興　ほとんど皆さんに言うていただいてますので余り何も言うことはないんですが、パートナーシップセンターについて一つ思うことを、本当に一つだけですが、せっかくつくったので、このせっかくつくったというところを大事にしたいです。せっかくつくったんやけど何やったんやろうってならへんように、やっぱりいろんな方に知ってもらうことも大切やし、そこで何をやってるんやという、やってることがしっかりわかる、ちゃんと利用する価値のあるものにしていく、これを京都府さんも力入れてくれてはることやと思いますので、ここに京都府の、今まで亀岡市だけがやってたところに京都府とも一緒にやるというところに、ここにメリットというものを出していかへんかったら何のために一緒にやったんやろうということになりますので、ぜひともそういうところを生かしていただいて、２市１町、皆一緒に頑張れるようなものをつくっていっていただきたいと思います。私らも何ぼでも協力させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○岩崎栄喜雄　南丹パートナーシップセンター、これは大変うれしく思ってますけども、これは広域的な事務の管理というのをしていただくことは、一番の願いであって、うれしく思いますけども。

それと、この南丹地区の交流、これも、ＮＰＯといいましても、やはりソフトとハードのＮＰＯがございますので、これをまた分けてそういう会合をするとか、情報交換をお互いにして、今後のこの南丹のためのことを、または京都全体のことを考えるようなことができれば、本当に楽しくおもしろいものができ上がり、未来の子供にも託せるかなというふうに私は思っております。

それと、地域再生プロジェクト、私ども、本当に山田知事に感謝をいたしております。１年目、２年目、３年、３年地域再生のプロジェクトの資金を受けながら助かりました。といいますのは、やはり地域が京丹波なんで、本当に企業が少なく、中でも経済も冷え切っておりますので、余り企業さんに協賛金とか云々のことは言いにくくて困っておりました。私たちメンバーが、何とかこのお金を自分たちでつくり上げる。そして、地域に募金箱を、各商店街に募金箱を約 50 個つくりました。これは、冬ほたるの支援募金箱ということで、なるべくこの冬ほたるというのを地域に広めようということになりまして、このような募金箱に入れていただくことが一つの光を放つという意味で思い、50 個つくり、50 個を京丹波じゅうに置かせていただきましたけども、そういう地道な活動をしながら、もうじき冬ほたるが 10 年になるんだなということを思いながら、そういうことばかりやっておりまして、本当に我々もゴルフをする中で、ゴルフでも何とかそういう支援ゴルフコンペをしたら何とか、また我々の思いに共感していただいて、ということでゴルフコンペもさせていただいて、少しでもこの地域に、京丹波市に来ていただけるような機会をつくることも大事かなと思いながらも、そういうことをさせていただきながらでもやるんですけども、なかなかそんだけの金額ができないので、そのときに地域再生カプロジェクトを応援します。願ってもない、神様のこれはおぼしめしだと思いながらもおったわけで、そういう感謝の中で、余りに甘えるのもあれですけども、ある程度力がつくまでは、私たちはそのまま行ってほしいなと、そのまま、今後ももう少しある方がなというふうに思っております。ですから、その点、知事、よろしくお願いいたします。

以上です。

○山田啓二知事　大変、京都府で、市町村に対する期待を言っていただきまして、ありがと

うございます。

最初、坂本さんから活動資金の話が出たんですけれども、そして最後に岩崎さんからも地域力再生を初めとして、皆さんからも、地域力再生のプロジェクトの方の交付金について非常に評価をいただいてることに対して、私どもが感謝を申し上げたいと思っておりまして、この点についてはやっぱりこういう動きというものをどういう形で前進させていくかという観点から考えていきたいなというふうに思ってます。そうした面ではまだまだ活動力の弱い、地域の活動を支えていくという、そうした資金が要るということは間違いないんじゃないかなというふうに思っておりまして、その点についてはこれからもしっかりとフォローをさせていただきたいなというふうに思っております。

そして同時に、二つの方向があるのかなという点も思っておりまして、一つは、最初、坂本さんが言いましたように、頼ってるだけではなくてやっぱり自分たちでそれを広げていかないかんという話がありまして、特に地域の活性化とか農業とか、そういったものをやっていく場合には、交付金だけではなくて、我々は小口投資のファンドというものをつくって、それでファンドからそういうＮＰＯの応援をしていきたいというふうに思ってます。ことし、もうすぐ募集が始まると思うんですけれども、ＮＰＯファンドがいよいよできます。これは私の発想からすると、インドのグラミン銀行というのがあります。つまり、何の元手もないし、何の担保もないけれども、本当働いてみたいという人に対して、無担保・無保証で小口のお金を貸していく。そうすると、みんなこんなのは貸し倒れになるんだろうと思ってたら、インドのグラミン銀行はそんなことはなかった。きちっと資金が回転して、また次の人に向かって前進できるような仕組みになったというのがあります。私は、ぜひともこういったグラミン銀行みたいな形がＮＰＯファンドでできないのかなと思ってますし、さらに、農商工の連携ファンドとか、コミュニティビジネスのファンドも、これは経産省ときちっとタイアップして今できてますから、こちらの面は充実をどんどんしていく。

同時に、パートナーシップセンターができましたけども、我々はやっぱり、行政というのは、変な話、一緒になってやっていくことによって行政も本当に助けていただいてるわけで、支えてもらってるわけです。これは、パートナーシップワークという形で地域力をさらに強化していくことによって、我々行政もより府民の皆さんにいいサービスができるんじゃないかなというふうに思っておりますから、こうしたものについては強化をしてい

きたいというふうに思っております。

それから、税金とかそういった話もあったんですけども、ここは難しい話もあります。河村さんの話が出ましたけど、名古屋で 10%減税するというのはすごくいいみたいな話なんですけども、私の頭の中に一個ありますのは、ちょうど 20 年ぐらい前にアメリカのカリフォルニアでそういう運動があったんですね、それがある程度成功したんです。よかったんだけど、結局、20 年たったらどうなったかというと、今、カリフォルニアは破産状態になってます。だから、影響というのは 20 年ぐらいかかって出てくるんですよ。地方行政とか地方自治というのは、そのくらいのスパンで物を見ないと。だから、今、10%をやって、5年、10 年はいいかもしれないけども、子供の時代になって、カリフォルニアはとにかく破産になったわけです。もうシュワちゃんえらい状況になって、全部という状況になってるわけですね。このことだけは、やっぱり私は理解をしていただきたいな。我々のやったことは、今は出ません。20 年後に、自分たちの子供の世代に影響が出るということだけは、頭の中に入れてほしいと思います。

その中で僕一つ思ったのは、例えば、ふるさと納税なんかで私ども文化財だけやってます。あれ、一種の寄附金行為をやっているんですよね。こうしたものをもっと柔軟にやって、ＮＰＯを支援するような形のふるさと納税をやっていただければ、そういう制度をつくれば、今の仕組みの中でももっと応援できるんじゃないかなとか、ふと思いつきました。もちろんＮＰＯの認定法人の業務代行、これも重要なんですけども、私ども、逆に言うと行司の立場ですので、行司が一緒に介添えしちゃうと、昔のプロレスみたいなもので、どっちの立場のレフリーかわからないみたいなことになってしまいますので、多分、中間ＮＰＯ、ここをしっかりと我々もう一回支援をさせていただいて、この中間ＮＰＯ、つまりＮＰＯ支援法人。さっき援助者を支援する援助法人ってありましたけど、あれと同じですよね。そういうものを我々が支援することによってうまくいけるようにできたらいいなと思っております。

中島さん、今回は要望なかったんですけど、さっきのスロープの話は、本当に典型的な縦割り行政の弊害ですので、何とかするようにちょっと努力をしてみます。

まさに高橋さんのおっしゃったのは地方分権。地方分権というと、何か地方分権、地方分権と叫んでると格好いいみたいなんですけど、中身はよくわかんないとこがあるんですよね。私は、地方分権の一番基礎は、住民自治やと思ってます。つまり、こうした皆さん

の住民活動を盛んにしていくことが、盛んになるような体制をつくることが、これが地方分権だというふうに私は思ってます。先ほど番号で呼ばれたという話がありましたけれども、まさに中央集権では、そうした地域の住民の活動を支援することはできません、支えることはできません、霞ヶ関にいてそんなの無理です。多分、京都府庁にいてもなかなか難しい。だから、私たちは広域行政局というのを一生懸命つくって、そこに権限を移して、さらに市町村長の皆さんにもできるだけ権限を持ってもらって、それ別に市町村に頑張ってもらいたいというわけじゃないんです、本当は。住民の皆さんに頑張ってもらいたい、そして、住民の皆さんに頑張ってもらうように説得できるのは、住民の皆さんが選んだ方だけですよ。私はそう思います。私は選ばれたから、逆に住民の皆さんにお願いをして、する立場にあると思ってます。市町村長さんも同じです。住民の皆さんが選んだんだから、選んだ人が今の現状を言ってこうですってお願いできる。住民の皆さんも頑張ってください。でも、霞ヶ関の人たちにそんなんお願いされたら、あんた方、自分の給料高いんだから働けと言われるだけですよ、皆さんね。これがだめなのは中央集権と地方分権の差だと思ってます。そういうシステムをつくるように、我々も絶対努力をしていきたいというふうに思ってます。

中西さんがおっしゃってるのは、パートナーシップ、このパートナーシップワークというのは、特に中西さんのような方の活動というのは、我々が一番これからお願いをしていかなければいけない。本当の意味で障害を持っている親の方が、一番頼れる、一番相談できるのは、同じ状況にある方じゃないかと私思うんです。そうすれば、本当にお互い同じ立場だからこそ言えることがある、同じ立場であるからこそ苦しみを分かち合えることができる、その方が一番そういう立場の方を救える立場にあるんだと思います。それは、行政では難しい面がある。だからこそパートナーシップが必要なんだというふうに私は思います。岩崎さんも本当に３年間頑張っていただいて、これからだと思います。そうした活動をこれからも支える京都府である。そして、そのあかしがパートナーシップセンターのきょうの設立の、私は一つの証明じゃないかなというふうに思っていますので、どうか皆さんもよろしくお願いを申し上げたいと思います。

○鹿取悦子コーディネーター　ありがとうございました。

私たちの活動は、地域、それから行政、それからいろんな関係団体と連携しながら、そしてできるだけ長く続けることができるようにしていく努力と、それからこういった意見

する場を、きょうだけではなくて、またそういう機会をどんどんつくっていただいて、そういうパートナーシップセンターになることを期待したいと思います。

時間が過ぎておりますので、司会を植月さんの方にお返ししたいと思います。

○司会　コーディネーターの鹿取さん、ありがとうございました。

皆さんからさまざまな活動のお話を聞いてると、私も何かやらなあかんなという、そんな気になりました。そしてまた、ジャンルを超えてどんどん広がる市民活動というのは本当にすごいなというふうに改めて思いました。会場の皆様はいかがでしたでしょうか。

さあ、きょう、コーディネーターを務めてくださいました鹿取さんを初め、パネリストの皆様、そして山田知事に大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

山田知事さん、最後になりますが、きょうのすべての催しのまとめを一言で結構でございますので、お願いいたします。

○山田啓二知事　きょうは、本当に最後までお聞きいただきましてありがとうございます。

「明日の京都」というのは別に行政がつくるものではなくて、本当に今のパネルでもお聞きいただいてわかりますように、みんなでつくるものだというふうに思ってます。そして、そうした夢を本当に皆さんと一緒に描いていきたいと思っておりますので、これだけではないと思います。ぜひとも皆さんの思っている思いや願いというものを、どんどん京都府庁にお寄せいただきたいなというふうに思っています。そのためにはホームページを見ていただきますと、そういった仕組み、府民提案とかありますし、また、今回の府民交流会の事務局の方にもお寄せいただきたいと思います。皆さんの夢で、夢を描いて、その夢を実現することによって「明日の京都」をつくってまいりましょう。

本当にきょうはありがとうございました。

○司会　これをもちまして、「未来をつむぐ『明日の京都』ビジョン　あなたとつなぐ府民交流会ｉｎ南丹」を終了させていただきます。

山田知事を初め、ステージ状の皆様、そして会場の皆様、どうもありがとうございました。

さあ、それではこれでステージの皆様には御退席いただきます。どうもありがとうございました。

さて、会場の皆様も長時間にわたりおつき合いいただきまして、ありがとうございました。

最後になりますが、一つお願いがございます。袋の中に入れさせていただいたアンケート用紙、こちらのアンケートに御協力をお願いいたします。お帰りに係の者、持っておりますが、箱に入れていただきますようにお願いいたします。

きょうは、時間が限られて発言できなかったと思ってらっしゃる方も、このアンケート用紙に御意見を御記入いただきますようお願いいたします。お帰りの際に、出口のアンケート回収箱にお入れください。

そして、皆様、最後になりますが、どうぞお帰りになりながらお耳の方だけをお願いいたします。お配りしておりますチラシにも書いてございますが、本日の様子を８月 20 日木曜日の午後９時 50 分から、ＫＢＳ京都テレビの番組「旬感☆きょうと府」で放送いたします。こちらもぜひごらんください。

本日は、御参加いただき、まことにありがとうございました。どうぞ傘などのお忘れものがございませんよう、お気をつけてお帰りください。ありがとうございました。